

「女性たちの奉仕」

2015年06月20日

ルカによる福音書 8章1節～3節。すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

福音書は主イエスの生涯、殊に十字架と復活に焦点を当てて書いている。その周りで、心は熱しているが、主イエスを理解できない弟子たちのオタオタした姿も描かれている。女性たちの姿は殆ど描かれていないが、ルカ福音書は上記の女性たちが奉仕していたと書いている。聖書の著者は男性たちである。当時は、女性の立場は極めて低く、無視されるのが常であった。その中で、ルカ福音書の上記の記述は特異で、著者の女性たちへの思いやりがうかがえる。そして、この記述は意味深いものである。

主イエスはガリラヤ地方を中心に「神の国」の宣教をし、町や村を巡り歩き、福音を告げ知らせる旅を続けた。宣教団には12人の男弟子がいて、宣教を担っていた。宣教団の働きは圧倒的で、飢え渴いた民衆は黒山のように群がっていた。ユダヤを揺り動かす大宗教運動として展開されていたのである。

その宣教団に多くの女性たちが加わっていた。「マグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ」と3人の固有名詞が書かれている。マグダラのマリアは7章後半に登場した罪深い女・遊女であると受け止められてきたが、彼女は遊女ではない。おそらく、マグダラの富豪の娘であろう。彼女は7つの悪霊に取りつかれていた、即ち、強度の精神病を患っていた。それを、主イエスにいやしてもらい、以後、喜びながら宣教団に加わったのである。彼女は十字架、埋葬を見届け、復活の主イエスに最初に出会い、復活証言をした女性である。主イエスに最後まで従ったので、主イエスの妻ではなかったかと言う人もいるくらいである。ヘロデの家令クザの妻ヨハナは身分の高い人の妻であった。スサンナはどんな女性か全く分からない。その他にも、多くの女性たちが加わっていた。この記述は納得できる。主イエスと12弟子だけでは宣教団を形成できないであろう。「彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」と書かれている。彼女たちの無私の奉仕が宣教団の生活を支えていたのである。ルカ福音書は女性たちの奉仕に光を当てている。教会の歴史においても、男たちが指導者になり、牛耳っているかのようなのであるが、教会に仕えて、支えたのは女性たちではなかったか。現在の教会でも、全く同じである。

宣教団は男女混成の群れであった。この状態は当時では考えられない、それ以上に許されないことであった。女性は子どもの時は親、結婚すれば夫のものとなされた。結婚した女性は家に縛られ、道で他の男と立ち話をするこゝさえ許されない。まして、家族ではない他の人たちと共に旅をすることなど、できないことであった。主イエスの宣教団は常識を打ち破り、女性を含めた旅する群れであった。群れに加わって宣教活動に奉仕する幸いは、そのまま女性解放を意味した。これは、律法学者たちにとっては、あるまじき律法違反で、主イエスに対する反感は、ここにも大きな原因があったのである。